

私の外国語遍歴 My Life with Foreign Languages

戸賀崎博保

Togasaki Hiroyasu

満70歳を迎えようとしている現在、私は実践女子大学で『フランス語』を週5コマ、『フランス文学』を週1コマ受け持っている。趣味として自習用にNHKテキストの『フランス語』（テレビ・ラジオ）、『イタリア語』と『スペイン語』のラジオ版を数年来購入し続けている。しかし予習・復習の時間は10分にも満たない。机に向かってするのではなく、和式トイレにしゃがんだ時にするのである。英語、ドイツ語、韓国語、中国語、ロシア語に関しては洗面所か朝の入浴中に小型ラジオを通して聞き流しているに過ぎない。他にはテレビ講座で10分程“アジア語”として放送されているインドネシア語、タイ語、トルコ語などを観た事がある。さらにはポルトガル語、アラビア語、上海語なども僅かな時間ではあるが観たり聞いたりした事がある。極東英語放送（FEN）に関してはちよくちよくスイッチを入れてはいるが、私の実力では未だに内容をほとんど理解する事が出来ない。高校生の頃、旺文社のラジオ英語講座を熱心に聞き、英文日記を高校2年の時（昭和32年：1957）から付け始めたのであった。昭和34年：1959年に立教大学の経済学部・経営学科に入学してからも英語会話に夢中になり、一年生の時、旺文社の『百万人の英語』というラジオ番組に出演した事があった。講師はハワイ育ちの日系人、鬼頭イツ子先生であった。小さな録音室に机を挟んで二人向かい合って椅子に座り、テキストに従って日常会話を発音したり、簡単な問答をするというものであった。鬼頭イツ子先生は当時40歳代と思われるご夫人で、声が美しく発音が殊の外、明瞭だった。私も英語の発音に異常なまでに拘りがあり、かなり自信を持っていた。この放送録音を徒弟の利彰君がレコードにしてくれ、何度か聴く度に、自分の声と人間性とでもいうものを認識し、痛痒い恥づかしさを持って一人狼狽していたのである。当時の英語会話の講師としてJames HARRIS先生がラジオの方で、William MOORE先生がテレビの方で活躍されていた。日本人の講師としては松本亨先生の名前が知れ渡っていた。五十嵐新次郎先生、田崎清忠先生、江川泰一郎先生なども常連であった。James HARRIS先生の親しみのある明るい口調、William MOORE先生の淡く温か味のある笑顔、そして時折披露するご自身のバリトンの歌声……、五

十嵐新次郎先生の飄々としたものまね入りの美声、田崎清忠先生の爽やかな誠実さ、
江川泰一郎先生の大らかな風貌……。ついこの前のように甦って来るのである。

大学受験講座の英語担当の先生方の声や口調も懐かしい……。海江田進先生、
龍ノ口直太郎先生、朱年田夏雄先生、多田幸蔵先生、西尾孝先生……。もしかす
るとお名前の綴りを失礼ながら、間違えているかも知れない。英会話の方は大学の4
年間はNHKのラジオとテレビの講座、それにラジオ東京の旺文社・『百万人の英語』
を熱心に受講し続けていた。大学入学の年、昭和34年(1959年)から、さらに『フラ
ンス語』講座が加わったのである。

ラジオでは前田陽一先生が最初であった。当時60歳を越えていらしたであろう、ス
イスで何十年も生活されたというフランス語の第一人者であられた。高音のしゃがれ
たお声で文法の解説をされ、合間にフランスの童謡をご自身で歌われたのであった。
ある時には、フォーレの歌曲：ヴェルレーヌの詩に乗せた『月の光』を不世出のバリ
トン歌手シャルル・パンゼラによる演奏を聴かせて下さったのである。数年後に『テ
レビ フランス語』講座が鮮烈なデビューを飾ったのである。小林正先生の後を受け
て朝倉季雄先生が担当され、モレシャン(MORECHAND)嬢が引き続きアシスタントを
勤めたのである。モレシャン(MORECHAND)嬢の魅力は絶大であった。大きな瞳、厚
い唇、豊かな表情、包み込むような声音……。男ならば、恋人を忘れて見入って
いたのではないか!!! ドン・ホセがミカエラという許婚を忘れてカルメンの誘惑
に負けてしまったかのように……。当時、私はテレビの画面を見ながら、朝倉季
雄先生までもがモレシャン(MORECHAND)嬢に恋していたのではないかと察知した程
であった。

それはさて置き、日本に於ける一般の大学の第二外国語(英語以外の外国語)は全
学部全学科に行き渡っていたようで、当時、ドイツ語かフランス語かの二者択一の1・
2年生必修選択科目であった。第三外国語としてやがてスペイン語が現れ、ロシア語
もほぼ同時期に出て来たように記憶している。立教大学でも、1960年、私が2年生の
時に、スペイン語が全学部全学科の学生に1講座開講され、初日の大教室に100名以上
が殺到したのである。先生のお名前を忘れてしまったが、目が大きく、唇の厚い、ず
んぐりとした50歳位の日本人男性講師であった。初めの2・3回は誰もが意欲的に出
席するものであるが、次第に遠ざかり、私もその例に漏れなかったのである。今覚え
ているのは《*Ne soignons pas parler*》(我々は話す)という動詞の活用だけである。

英語に関しては、私の情熱が冷めることなく、1955年以来、55年間に亘ってささや
かながらも勉強を続けているのである。しかしここ数十年はNHKのテキストを購入す
ることもなく、机に向かう事もなく、従って予習・復習を全くしていないのである。
英字新聞に関してもど無沙汰状態がかなりの期間続いている。大学生時代にはジャパ
ンタイムズ The JAPAN TIMES や スチューデントタイムズ STUDENT TIMES 等を目の前にし

て人気がない図書館の片隅で、辞書を引かずに、理解しようと奮闘していたのである。大学の教員になってからも、例えば玉川大学では、昼休みに英字新聞を読む為に図書館まで足を運んだものである。最近では日本の歴史や文化についての英語版を読もうと決心し、喫茶店や電車の中で時折、2、3ページ位、読む事がある。

英文日記は高校2年の時に始めて、大学4年まで6年間続き、フランス文学科の3年生に編入学してからはフランス語日記に切り替え、それが現在まで何と45年もの間続いているのである。このように長い間の習慣にも拘らず、私の英語及びフランス語の実力はほとんど進歩が見られないどころか、他の外国語に手を出した事によって、むしろ衰退してしまっているのである。自分の非才を今更、嘆いて見ても始まらないと自分に言い聞かせながら、外国語番組のラジオとテレビのスイッチを反射的に付ける事を今もって毎日繰り返しているのである。このように「私」と「私」との付き合いはこの先も“河の流れのように”10年位は続くように思えるのである。

英語及びフランス語の思い出は、当然の事ながら数多い。しかしスペイン語の思い出が特に懐かしい。12年前の平成10年(1998年)の頃である。我が家から300m位しか離れていない、日野市多摩平に、「ひの社会教育センター」という建物がある。そこで開かれている各種カルチャー講座の中に“英語で教えるスペイン語”があった。チラシにスペイン女性の写真が載っていた。目が大きく、^{おもなが}面長の美人であった。名前が“カルメン”とあって、私は数日後に申し込みの手続を済ませた。

水曜日の夜の7時から8時30分だったと記憶している。初日に出席して見ると、ご婦人が5名、40歳位と20歳台と思われる男性が2人いた。カルメン先生は、身長が165センチ位のスリムな体型の予想通りの美人であった。明るいはっきりとした英語で自分の生い立ち、現在の家庭環境などを率直に話された。当初からテキストがなく、手書きの文法事項や会話文のプリントが配布され、我々受講生は読まされたり、質問されたり、とにかく和気藹々とした雰囲気の中で授業が進められた。40歳位の男性は中学校の美術担当の先生であった。スペイン語歴が長く、しっかりした文法の知識を持っていた。1ヶ月も過ぎると受講生同士が親しくなり、互いの性格や家庭環境などがほの見えるて来て、ご婦人方は概して裕福な暮らしをしているのが感じられた。あるご夫人は、息子さんの結婚披露宴を豪華客船で行ったであるとか、別のご夫人は、ツアーでヨーロッパ旅行をして来たであるとか、また別のご夫人は、ご自宅(豪邸?)でパーティーを開いたであるとか……

ほとんど全員が英会話が出来るので、この“カルメンさんの”スペイン語教室はまるで「英会話教室」であった。一人のご婦人だけはスペイン語だけでカルメン先生と応答していて、そのスペイン語力は一頭群を抜いていた。カルメン先生は美貌も然ることながら、性格が素晴らしかった。横田基地で同居している今のご主人(黒人のアメリカ人)の事、9歳になった娘さんの事、前のご主人の成人間近い息子さんの事

などを率直に話して聞かせ、われわれ受講生を事あるごとに横田基地内での催し物に招待してくれ、ホームパーティーも何度か開いて下さったのである。授業は所謂^{いわゆる}学習塾ではなく、異文化交流親睦会の様相を呈していた。この講座の開始時間の19:00は守られていたが、終了時間の20:30は、毎回15分から30分位延長されるので、いつもの愛嬌のある女性事務局員さんも、ちょっとやきもきしながら、教室の外で待機していた事を思い出す。

カルメン先生は授業の余白としてスペイン語を使うゲームを用意していた。しり取り遊びであるとか、スペイン語の文章を聴いて、その単語と絵を黒板に書かせたりとか、所謂^{いわゆる}遊びながらスペイン語を学ぶというものであった。時折自家製のクッキーのような物を持ってきて配るのであるが、ちょっと離れた所に座っている受講生に対して、にこにこしながら、それを親指と人差し指に挟んで投げるのであった。食べ物を投げるのは、日本では御法度^{ごはつと}であるが、カルメンさんの場合、左程私には気にならなかったし、他の受講生の中にも眉^{ひそ}を顰めていた人は見当たらなかった。

カルメンさんの家庭は幸せそうに思えたけれども、経済的には左程恵まれていなかったようである。例えば九州へ旅行する時などは一般の旅客機の代わりに横田基地所有の小型軍用機(?)を利用するとの事である。トイレがないので、男も女も空中垂れ流しだそうである。カルメンさんは日本の生活をこよなく愛していた。ファミリーレストランの『ジョナサン』がお気に入り、そこでの“おでん”の匂いがたまらなく好きだと目を細めて語っていた。……日本での生活は2、3年だったのでないかと思われる。最後の授業を終えて、平成12(2000)年にご主人の転勤でイギリスに経って行かれた。我々生徒の中の何人かのご夫人方とはその後、文通が続いているのかも知れない。

イタリア語の思い出と言えば、イタリアのアマチュア合唱団“ラ・ファイタ”(La Faita)の来日である。立教大学グリークラブ(合唱団)の卒業生で組織された“トリニティ・コール”(Trinity Chor)が東京での日伊ジョイント・コンサートを実現させたのである。“ラ・ファイタ”(La Faita)はヨーロッパの合唱コンクールで第2位に輝いた25名程の男声合唱団である。“トリニティ・コール”はコンクールに1度も参加した事のない、30名程から成る、熟年混声合唱団である。この日伊ジョイント・コンサートはイタリア側からの申し出を受けて、日本の優秀なアマチュア合唱団が各地で、多数応募したそうである。その新聞広告を見た岩重^{いわしげと}十四三君^{しじぞう}と言う“トリニティ・コール”の団員が独断で交渉し、東京での夢の日伊ジョイント・コンサートとなったのである。1994(平成6)年9月23日(金曜日)、会場は渋谷区にある『こまげエミナス』であった。“ラ・ファイタ”(La Faita)のメンバーは、地方での演奏旅行を終え、翌日、早朝に宿舎を出発し、バスで15:00頃東京に到着し、宿舎のホテルでほとんど

休む暇なく、16:00からのリハーサルに笑顔で登場し、淡いブルーの長袖のワイシャツというユニフォームでステージに立ち、宗教曲、イタリア民謡、黒人霊歌（英語歌唱）などを披露した。一方、“トリニティ・コール”（Trinity Chor）は、イタリア古典歌曲（原語演奏）と日本の歌を発表した。500人収容の『こまばエミナース』はいささか狭すぎた嫌いがあったが、この親善コンサートは大成功であった。大成功の余韻を受けて、隣接する会場でレセプションが催された。10程の丸いテーブルに、若干の聴衆も含めて、両合唱団のイタリア人、日本人が5、6人ずつ入り乱れて着席し、各テーブルに配置された若い日本人の女性通訳を通して歓談したのであった。その合間に両合唱団は互いにそのレセプション会場の小ステージに集まり、上機嫌に澁刺と余興気分歌合戦を展開したのであった。そのレセプションの冒頭で、“トリニティ・コール”（Trinity Chor）の団長として私が挨拶をイタリア語で行った。この日伊ジョイント・コンサートの窓口となったボルディーニ氏に翻訳をお願いし、そのイタリア語の文章を私は3ヶ月位かけて暗誦した成果の発表であった。会場は意表を突かれたようであったが、イタリア語は日本人にとって小学生の頃から音楽用語で馴染みがあり、私も敢えてその事に触れ、アレグレンテだのクレッシェンドだのフェルマータなどと云った単語を早口に、たたまかけるように、イタリア人風の発音で披露すると、日本人からも、イタリア人からも陽気な笑いが起こったのである。

翌年、1995年に“トリニティ・コール”（Trinity Chor）は5月の連休を利用してイタリア演奏旅行と洒落込んだのであった。4月27日から5月3日にかけて北イタリア・ウーディネ地方、ガルダ湖畔に近い14世紀に建てられた3ヶ所の教会で、現地の3つのアマチュア合唱団：《LA FAITA》、《I Cantoni della Valtenesi》、《ALPE ADRIA》と、ある時は個別に、ある時は合同で交歓演奏会を持ったのである。

3年後の1998年に、幸運な事に、我が“トリニティ・コール”（Trinity Chor）はハンガリー&イタリア演奏旅行を実現させたのである。ハンガリーではバルトクの墓を訪れたり、由緒ある教会のミサに参列すると共にミサ曲をパイプオルガンの伴奏で地元の合唱団と一緒に演奏したり、又、レストランでの夕食の折にハンガリー音楽と踊りを直に鑑賞出来たのも得難い思い出である。日本を出発する前に私は、ハンガリー語の参考書を買ってちょっと勉強をしたのであったが、現地では一言も浮かばなかったのである。ハンガリー滞在は3日位だと記憶しているが、この演奏旅行の締めくくりはイタリアでの《LA FAITA》とのジョイント・コンサートであった。イタリア演奏旅行の第1回と第2回とが私の頭の中で、些か混同してしまうのであるが、確かな事は私のイタリア語が多少進歩していたのである。日本人の歌仲間と同行した折、買い物の際、団員とイタリア人店員との金銭上のやり取りであるとか、食事の給仕への伝達であるとか、タクシーの中での運転手との雑談であるとか、かなり流暢に接する事が出来、自分自身でその度胸の良さに後になって驚いてしまう程であった。言

移ってしまったのである。

カナダ館はホテル並みに快適であった。しかもチュニジア館と同じ申込料金で良かったのである。金(圭復)^{キム キュウボク}君がパリに来ているのを知っていたので、連絡を取ると、夜、路上喫茶で会う事ができた。彼の隣りにかなり美人のアジア系の女性が、にこにこしながら、一瞬、ちょっと視線を落として私の様子を窺^{うかが}っていた。金(圭復)^{キム キュウボク}君が私を紹介すると、彼女は立ち上がり、にこやかに私の右手を握り締めた。まるで男の握力であった。彼女は、韓国人で、パリの女子寮に住み、夏休みの間、この「大学都市」^{ラ スイテ ユニヴェルスイテール} La Cité Universitaireにあるイラン館に滞在していたのである。翌日から我々3人は、午前中はイラン館の彼女の部屋でおしゃべりをしたり、レコードを聴いたり、レコードの音楽に合わせて踊ったりして過ごし、一緒に学生食堂で昼食を取り、別れてから、夜の7時頃、学生食堂で待ち合わせるという生活をほとんど毎日2ヶ月間ほど続けていたのである。我々は授業に出る事もなく、働きもせず、一日一日を時の流れに身を任せながら、経済的な心配もなく過ごしていたのである!!! イランは当時、石油^{せきゆ}で莫大な利益を上げていた為か、学生寮の設備はカナダ館を遙かに超えていた。

金(和敬)^{キム ホウギョン}が彼女の名前であった。身長160センチ位、丸顔で目が細く、色白で、すらりとした体型が目を惹^ひいていた。透き通る声であったがフランス語は堪能とは云えなかった。ある時、金(圭復)^{キム キュウボク}君より少し早めに私が彼女の部屋を訪ねると快く中に通してくれた。彼女が飲み物の用意をしている間、机の上に目を遣^やると、驚いた事に女性の性器の詳細図のページが開かれていたのである。韓国語が図の近く^{あわ}に記されていた事からして韓国の本に違いなかった。台所から戻って来た彼女は慌^{あわ}てた様子もなく私の前にコーヒーを置いてくれた。しばらくすると金(圭復)^{キム キュウボク}君が現れた時、彼女は開きっぱなしのそのページに気が付き、慌^{あわ}てて本を閉じたのである。彼女が持っていたレコードの中に、ジョルジュ・ムスタキのシャンソン特集があった。『異国の人』であるとか『時は過ぎて行く』などを聴きながら、曲に合わせて我々3人は自己流に、いつものように踊り捲^まくったのであった。我々3人は爽やかな相思相愛関係にあった。金(圭復)^{キム キュウボク}君は私とほぼ同年齢、金(和敬)^{キム ホウギョン}嬢は5歳ほど年下であった。二人とも韓国の名門大学の出身である。前者はソウル大学、後者が梨花女子大学である。時折、我々3人の前に何人かの韓国人が姿を現わし、交友にアクセントを付けてくれた。私は韓国語を何一つと云って良いほどに理解出来なかったが、彼らの話し方のリズムやイントネーションを自然と把握する事が出来た。

そこで、時折、彼らの前で英語、スペイン語、韓国語、タイ語などを出鱈^{でたらめ}目の単語で物まねし、数行の演説を披露して喝采を浴びていたのである。ある時韓国の歌の楽譜が私に手渡された。内容は、ある詩人が故郷を離れ、望郷の気持ちを切々と訴えるというものである。♪ ソーラソミド レドラソー ドーレミーソ ファミドレー♪
・・・というメロディーの下にローマ字が記されていた。♪ H e nun Jese Oduwnd e

・・・の所で早くも私は金（圭復）君から注意を受けた。韓国語のUの母音には2種類ある事に私は近年になって初めて気が付いたのである。つまりUnと唇を突き出すものと、Wnと唇を横に引っ張るものとである。

翌年（1971年）の2月14日に私は帰国の途に就くべく国鉄モンペリエ駅を、外国人と日本人とを合わせた20数名の友達に見送られて離れ、1週間ほどパリに滞在し、何回か金（圭復）君、金（和敬）嬢と会っていた。その折、2人は、記念にメッセージの入ったジョルジュ・ムスタキのレコードを手渡し、私を何年か後に、韓国へ招待すると言ってくれたのである。出発の日、2人は、早朝にも拘わらず、オルリー空港まで見送りに来てくれた。あれから40年、1、2度金（和敬）嬢と文通したがその後、音信が途絶えてしまった・・・

結局韓国人同士の2人は結ばれたのではないかと思う。

私が1971年の2月に帰国し、その年の4月から桜美林大学の非常勤講師に着任して1、2年後に日韓大学生夏休み合宿と云うのに応募した事がある。教師としてではなく、一学生としての身分で参加が認められたのである。場所がワウル市から10キロほど離れた村の小学校で、日本人男女大学生100名、韓国人男女大学生100名が幾つかの教室で1週間の間、雑魚寝をし、昼間は土の道路の修復労働をしたり、川辺でグループごとに輪になって、あるテーマについて英語で意見を交換したり、夕食後は韓国の踊りや芝居を鑑賞したりして日韓友好親善の機会を、全て込みの当時僅か4万円の参加費で得る事が出来たのである。各小グループに韓国人の世話係が一人いて、日本人学生とのパイプ役を果たしてくれていた。韓国人女子学生の中に、パリで出会ったあの金（和敬）嬢に似ている娘がいた。私は話をしたいと思っていたのだがなかなかチャンスが訪れなかった。キャンプ後半の夜会の時、世話係の青年に話して見ると、その青年がその女子学生を私の傍に連れて来てくれたのである。彼女は金（和敬）嬢よりも一回り小柄であった。丸顔で目が細く、しとやかな物腰で、落ち着いた低い声でゆっくりとした英語で受け答えをしてくれた。この日韓大学生キャンプの中に、一人だけアメリカ人の女子学生が何故か参加していた。話しかけて見ると、フランス語も堪能であった。しかも韓国語もかなり出来たのではないかと思う。彼女はこの野外パーティでの韓国語の芝居の内容を見事なフランス語で私に伝えてくれたのである。見知らぬ人との思いがけない出逢いは、良くも悪くも人生の栄養である！！

このキャンプを機会に私は益々韓国という国に興味を持つようになり、日韓関係の歴史書等をさらに何冊か読んでみた。その一方で残念な事に、韓国語への理解力が依然として、芳しくないままだった。ハングル文字は40年経った今、すっかり忘れてしまっている。桜美林大学の金（潤瓊）先生は、授業の傍ら、東京で催されている韓国映画会、歌謡ショー、民俗芸能の会などを紹介して下さった。

私の外国語遍歴

私は韓国の映画から、魂を揺さぶる悲劇性、若者たちの天真爛漫な性格などをハングルの響きを通して感じ、その伝統芸能から、くすんだ深い叫びを背景にしたエネルギーな躍動感に感銘を受けたのであった。当時は日本人のほとんどが韓国映画や踊りなどを観る機会がなかった。ところが今日、この韓流ブームは正に隔世の感がある。

以上、私のささやかな「外国語遍歴」を披露したのであるが、私はどの言葉についても、実際は修得から程遠いのである。英語は57年、フランス語が51年、イタリア語が20年、スペイン語が12年のキャリアがあり、そして韓国語は、長い中断があるにはあるが、38年前に2年間学習しているのである。第三者の判断によれば、私は語学の達人と呼ばれて当然であろう。ところが、事實は逆で、現在の私は、全くと言って良いほどに自信を失くしてしまっているのである。ただ、唯一の取り柄として『継続』が挙げられるのかも知れない。さらに言えば、『体験』であろうか？ 出逢った異国の人々の情感と音声の記憶・・・あの懐かしい人々との言葉を通しての、特に外国語を通しての共感は、天にも昇るような快感なのである。今後は、それぞれの言葉に対して、さらに注意深く、目を凝らし、耳を開き、反復を厭わずに、日常生活において心身ともに健康に暮らせれば、一つの♪『薔薇色の人生』♪が存在した、と自分に向けて呟く時を迎えられるのではないかと樂觀しているのである。

(2010.11.19：戸賀崎博保 記)

My Life with Foreign Languages

Hiroyasu TOGASAKI

When I was a high school student, I began to be interested in English, so that I became accustomed to listen to the radio programs on English studies as well as to watch the TV ones.

And also I began to keep a diary in English.

In 1959 I entered Rikkyo University as a student of the Department of Economics. At that time my interest was not in Economics, but in English, French and Japanese literary works among cultural studies, while belonging to the Glee Club (chorus club).

After graduation from the Economics Department, I enrolled in the French Literature Department of the same university. I studied the works of François RABELAIS, Gustave FLAUBERT, Stéphane MALLARMÉ, Paul VALÉRY etc. there. At the same time I began to keep a diary in French in place of English, while taking private lessons of classical singing.

Then I had the opportunity to spend two years in Montpellier, located in the southern part of France from 1969 to 1971. I met many foreigners there. And I particularly associated with students who spoke French, English, Spanish, Thai, Korean and Vietnamese in their home countries.

Returning to Tokyo in 1971, I stood behind the lectern of various universities such as Obirin, Tamagawa, Rikkyo-Jogakuin and Jissen teaching French.

I started to listen to NHK radio and watch TV programs in foreign languages : Italian, Russian, Chinese and German including French, English and Spanish, etc.

I related in this essay my own experiences with native speakers communicating in English, in Spanish, in Italian and in Korean.

Though I have learned various foreign languages for many years, I am still a beginner in any language (alas!)

Communicating in foreign languages, in any case, is for me a great pleasure which uplifts me into an ecstatic spirit.